

- ①秋月『趙州録』二四二頁。
- ②秋月『趙州録』三六一頁。
- ③秋月『趙州録』七七頁。
- ④「又女人身猶有五障。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者有轉輪聖王。五者佛身」（『妙法蓮華經』卷四、大正九・三五頁c）
- ⑤秋月『趙州録』四五三頁。
- ⑥臨濟と趙州との出會いの場面。『臨濟録』と『趙州録』との相違\*\*。
- ⑦本書第二部第二章参照。
- ⑧脚について、少し論じたほうがよい。その含意について。それが觀念性とは對極にあるものを指示すること\*\*。
- ⑨「販私鹽漢」がごく普通の叱責の言葉である例は以下の通り。
- 有僧禮拜起。便垂下袈裟角曰。脱衣卸甲時如何。師曰。喜得狼煙息。弓弰壁上懸。僧却攬上袈裟曰。重整衣甲時如何。師曰。不到烏江畔。知君未肯休。僧便喝。師曰。驚殺我。僧拍一拍。師曰。也是死中得活。僧禮拜。師曰。將謂是收燕破趙之才。元來是販私鹽漢。『御選語録』卷一八（續藏一一九・三六六頁c）
- 師問新到、從什麼處來。云、南方來。師云、還知有趙州關麼。云須知有不涉關者。師叱云、者販私鹽漢。（秋月『趙州録』三四七頁）
- 師問僧、離什麼處。云、離京中。師云、你還從潼關過麼。云、不歷。師云、今日捉得者販私鹽漢。（同三八六頁）
- ⑩こうした二項選擇・二項對立的質問に對して、趙州は「涕唾」のごとし、と應對している例がある。
- 問、行又不到、問又不到時如何。師云、到以不到道人看如涕唾。（同三三九頁）
- ⑪「你娘醜陋」という表現は、「他娘的」あるいは「他娘得」が「こん畜生」という罵語であることと、何か關係はあるのだろうか。識者の教示を賜りたい。
- ⑫たとえば、『支那文を讀む爲の漢字典』には、「頭の最上部なり」という意味と同時に、「凡そ最高の處をみな頂といふ」とある。

⑬『禪文化研究所紀要』第十五號、一九八八年。

⑭南泉の「異類中行」を「畜生行」と誤解した僧の例が、『祖堂集』に収録されている。

有人到歸宗。歸宗問、從什麼處來。對云、從南泉來。歸宗云、有什麼佛法因緣。對云、和尚上堂、告衆曰、夫沙門者、須行畜生行。若不  
行畜生、無有是處。歸宗沈吟底。僧便問、只如南泉意如何。歸宗云、雖然畜生行、不受畜生報。其僧却歸、舉似師。師云、實與麼道麼。  
僧云、實也。師云、孟八郎、又與麼去。（『祖堂集』三〇一頁b）

歸宗もとまどつたろうが、南泉の落膽は明らかである。「實與麼道麼」というのは、氣心の知れた歸宗に對して言ったのではなく、この僧  
が南泉の異類中行を、本當に「夫沙門者、須行畜生行。若不行畜生、無有是處」というふうに変換してしまつたのか、ということであろう。  
「孟八郎が、また、このありさまだ」という南泉の言い方には、こういう手合いがかなり多かつたことを示唆している。歸宗は「沈吟」し  
て、「雖然畜生行、不受畜生報」と言うが、南泉の「異類中行」とは何の關係もない。僧の誤解をそのまま鵜呑みにしたから、これは當然  
であるが、こうした歸宗の言葉もまた、「異類中行」を「利他行」「慈悲行」とする誤解へと展開したものと思われる。

こうした誤解は、南泉にしてみれば、やりきれないことであつたろう。また、問近にこうした誤解の生ずるさまを見たと思われる趙州が、  
自ら「異類中行」を説くことのないのも、當然のことと思われる。

なお、『傳燈錄』では、この一段は簡略化されて、南泉と歸宗の直接對決の形に變形されている。「一日師示衆云、道箇如如、早是變也。  
今時師僧、須向異類中行。歸宗云、雖行畜生行、不得畜生報。師云、孟八郎又恁麼去也」（南泉章）。これでは、歸宗はまるっきりバカみ  
たいである。歸宗は南泉と同參であり、連れだつて行脚を行なつた仲であり、氣心も知れていれば、實力もあつた（『祖堂集』は「師與歸  
宗、同行二十年」へ卷一六・南泉章、三〇〇頁a）と言っている）。そうした歸宗であればこそ、南泉が「畜生行」を舉唱することに違和  
感を覚え、「沈吟」したに違ひなく、やはり『祖堂集』のほうが原話の味を正しく傳えているようである。

⑮「無師自爾」について、次のような用例がある。

但以冥理自通。無師自爾。本自無物。由是見聞覺知即是報化。所以三十二相異體故。若離彼即同如來。報化佛總打却。何處存立。（續藏  
一一八・一四九頁a）

師示衆云。佛出世來。只爲衆生不會道。若不因善知識聞。名無師自爾。若因善知識聞。忽引經論作證。若自作得主不引經論。最省心力。

若引經論將他眼作自己眼。不得自由。大道一如無師自爾。若能如如不變。故不會迷。(續藏一一八・一四九頁b)

⑯この間に入る「法過眼耳鼻舌身意心、以無心意而現行。如今知解、不是嘍囉漢」の部分は、つながりが悪く、あるいはテキストの乱れかもしれないが、あえて解釋するならば、次のようになろう。「眞理は、〈眼耳鼻舌身意〉という六つの感覚および心を超えている。心的な感受作用なしに、行爲を現じることだ。いま君たちが働かしている知解は、眞理に達することのできるほど、したたかなものではない」。

「法」については、「且大道非明暗、法離有無數、數不能及」(續藏一一八・一四八頁b)という言明があり、また「心」「道(法といつてもよい)」「見聞覺知(眼耳鼻舌身意としてよい)」との關係については「心智俱不是道、見聞覺知皆屬因緣而有。皆是炤物而有、不可常炤。所以心智俱不是道」(續藏一一八・一四八頁b)と言っている。「法過眼耳鼻舌身意心」の典據としては、維摩經・弟子品に「法離好醜、法無増損、法無生滅、法無所歸、法過眼耳鼻舌身心、法無高下、法常住不動、法離一切觀行」(大正一四・五四〇頁a)と言う。

「現行」は、一應、唯識用語にあるが、ここでは、關係ないようである。「現行」については、「若認心是佛、心是三界采集主。若認智是道、智是多矯詐。若論佛出世時、喚作三界智人。說一切教義句理、喚作暫時受用具。若喚心是佛、認智是道、皆是處所。所以道、無心意而現行、暫時披垢膩之衣來、爲人說破」という言い方をしていことから、「心」や「智」の次元に束縛されることなく行爲を現出することと解した。

⑰『南泉語録』で「異類中行」に言及しているのは先の一箇所のみである。

⑱用例は次のとおり。

兄弟、今時人擔佛著肩上行。聞老僧言、心不是佛智不是道、便聚頭擬推老僧。無你推處。你若束得虛空作棒打得老僧著、一任推。時有僧問、從上祖師至江西大師、皆云即心是佛、平常心是道。今和尚云、心不是佛、智不是道。學人悉生疑惑。請和尚慈悲指示。(續藏一一八・一四六頁b)

既不是心、不是佛、不是物。和尚今却云、心不是佛、智不是道。未審如何。師曰、你不認心是佛、智不是道。老僧勿得心來、復何處著。(續藏一一八・一四六頁c)

大道無明、未曾有暗、非三界攝、非去來今。如來藏實不覆藏、師子何曾在窟。五陰本空、何曾有處所。且法身無爲、不墮諸數、法無動搖、不依六塵。故經云、佛性是常、心是無常。所以智不是道、心不是佛。(續藏一一八・一四八頁d)

いずれも『南泉語録』によるもので、『祖堂集』には一例もない。『南泉語録』と『祖堂集』では、異なる源泉から南泉の資料を得たことを示唆するように思われる。

南泉は「心不是佛、智不是道」と言うが、ここに見られる「心」と「智」に對する否定的態というのは、極めて注目すべきものである。というのも、玄奘佛教による唯識思想の出現と、これを克服しようとした法藏の唯心思想という展開によって、中國佛教は「心」に對して、空前の重要性を與えることとなったからである。

馬祖が「即心即佛」を説くのも、この「心」の重視と直結している。玄奘唯識に對して、法藏たちは如來藏思想を基盤とする唯心思想によって、これに對抗し、新たな総合的立場を構築することに成功した。これによって、心を「識」と捉え、徹底して迷妄の府と捉える玄奘唯識に對して、「一心」が強調され、それはそのまま「眞」であり、「佛」であると主張されたのであった。すなわち、「是心是佛」あるいは「即心即佛」は、馬祖の獨創というより、時代思想そのものであった。馬祖の獨創性は、この言葉の發明ではなく、その運用の仕方にある。「即心即佛」が當時の時代思想であるにしても、これを馬祖のように活用してみせた人物はいなかったのである。「即心即佛」が馬祖の言葉として有名になるのも、この意味では、ごく自然なことであった。

初期禪宗は、さらにこの「心」を第一主題とする時代思潮のなから、「無心」を主張し、これを佛教の根幹に据えるまでに到る。『無心論』はその典型であり、『頓悟要門』の中心テーマでもあった（本書第一部第二章「無心の周邊」参照）。この流れから言えば、南泉が「心不是佛」と主張するのは、『無心論』『頓悟要門』などを繼承する立場であり、今、特に付け加えるべきことはない。しかし、「智不是道」という發言については、注意する必要がある。

天台教學が禪宗に對して、かなり大きな影響を與えたことは、すでに先學の研究によって明らかであるが、天台教學の主要概念の一つに三智二觀がある。南泉の「智不是道」は、こうした天台教學を眞つ向から否定するものであると同時に、さらには神會の智の強調や、「定慧等學」に對する否定でもある。つまり、これは六祖壇經の否定でもあり、また神會を繼承したと稱して、智より知を重視する理論を展開する宗密をも、南泉は否定していると言える。要するに、「智不是道」とは、南泉以前の初期禪宗における主要思想であり、大きな理論的支柱であった「智」の重視を、根本からひっくり返した、極めて革新的な主張であった。

南泉が「智」を否定するのは、從來考えられていた佛道成就に對する第一義的要件として、すでに定型化し、固定化してしまっていたから

であり、宗密の「知」の強調は、「智」と「知」の位置づけを逆にしたとはいえ、「智」の否定ではなく、むしろその延長上にあったからである。固定化し、追求する価値を持つ対象となることによって、人々の迷妄は破られることなく持續する。智頭も神會も宗密も慧能も、さらには師である馬祖の言葉をも、南泉は否定し、超克することを説く。南泉禪の特徴は、こうした非常に強い否定の契機であって、「心」や「智」に限らず、従來の定型化した命題、定説といったものを、徹底して否定してゆくことにある。一切の定型的命題の否定によって、觀念の束縛を離脱し、固定化しえない存在の本質に直參することが狙われているのである。南泉の「異類中行」は、こうした南泉禪の根本的な指向のなから生まれてきたものにほかならず、非常に強い「觀念の剿滅」を主張する内容となっているのも、ごく自然なことであった。

⑲相手の大徳が經論の専門家であったことから、四句分別の形を借りて、皮肉っているのである。すなわち、經論解釋家ないし「今時學士」のやることは、すべてこうした言葉の分析をでないという痛烈な批判にほかならない。

⑳先に「道著則頭角生。喚作如如、早是變也」というときの「道著則頭角生」は一種の謗法の罪であることに注意したが、「被毛戴角」も同様である。これによる畜生と「異類中行」の畜生を混同すると、わけが分からなくなるので、注意を要する。

㉑『秋月龍珉著作集』一三、三一書房、一九七九年。

㉒『祖堂集』二九七頁a。

㉓この部分、『南泉語録』では、次のようになっている。

上堂云、諸子、老僧十八上解作活計。有解作活計者出來、共你商量、是住山人始得。良久。顧視大眾、合掌曰、珍重無事、各自修行。大衆不去。師曰、如聖果大可畏、勿量大人尚不奈何。我且不是渠、渠且不是我。渠爭奈我何。他經論家說法身為極則、喚作理盡三昧、義盡三昧。似老僧向前、被人教返本還源去、幾恁麼會禍事。(續藏一一八・一四六頁a)

㉔これは、趙州が「老僧此間、即以本分事接人。若教老僧隨伊根機接人、自有三乘十二分教接也了也。若是不會、是誰過歎」と、非常に厳しい突き放しの姿勢を取るのと、全く對照的である。南泉のほうが、包攝的な禪風を持っていたと言える。

㉕「還債」という發想は、特に珍しいものではなく、『傳燈錄』卷二・西天第十五祖迦那提婆章に收録される木菌の話のように、「入道不理、復身還信施」というのは、むしろ當時の僧たちの一種の通念であったと言える。たとえば、百丈も「貪愛有穢毫治不去、乃至乞施主一

粒米、一縷線、箇箇披毛戴角、牽犁負重、一一須償他始得」（『百丈廣錄』續藏二一八・八六頁d）と言っている。すなわち、百丈の場合、「披毛戴角」して「異類」になり、犁を牽き、重荷を背負うのは、明らかに「還償」のためであり、「利他行」や「慈悲行」とは何の関係もない。後に曹山の「異類」について検討するが、曹山は南泉とともに、百丈の思想の影響が見られ、その「異類」についても、こうした百丈の「異類」（披毛戴角）の考え方には、注目する必要がある。

②前掲「異類について」では、「知有」を「知有向上事」の省略形だとするが、必ずしも「向上事」と限定することはできないし、その必要もないであろう。むしろ、省略の妙味は、そのように限定しないところにあるはずで、實質的に「向上事」を指すこともあれば、そうでないこともあるというふうな、状況に即應して自在に變化しうる柔軟性を持たせた表現であると思われる。たとえば、曹山の場合、「知有」のあとに續くのは、意味から考えても、必ずしも「向上事」ばかりではなく、状況に應じて様々なものが設定されているようである。「異類について」では省略されているのが「向上事」であると推論するに際して、南泉以外の諸々の禪師の例を引き、必ずしも南泉に限定していないから、ここで曹山の例を検討するのは、有効な論據となるであろう。（以下、『曹山録』續藏二一九）

（一）師一日入僧堂向火。有僧云、今日好寒。師曰、須知有不寒者。僧云、誰是不寒者。師箴火示之。（四六三頁b）

（二）僧問、如何是無刃劍。師曰、非淬鍊所成。僧云、用者如何。師曰、逢者皆喪。僧云、不逢者如何。師曰、亦須頭落。僧云、逢者皆喪則固是、不逢者爲甚麼頭落。師曰、不見道、能盡一切。僧云、盡後如何。師曰、方知有此劍。（四六三頁b）

（三）僧問、雪覆千山、爲甚麼孤峰不白。師曰、須知有異中異。僧云、如何是異中異。師曰、不墮諸山色。（四六四頁b）

（四）師復曰、闡提有多種。……一類者知有自己本來事、呼爲父母。不因外得、無修無證、非因非果、不因師受、不從證行所得。不起父見曰殺、不起母見曰害。即是一切本分事、不敢不存、故曰殺害。纔有纖毫奉重得味、不成知有自己事也。故曰大闡提（四六五頁d）

（五）云、有一人無出入息、令渠知有正位。（四六七頁b）

（六）不斷聲色隨類墮者、爲初心知有自己本分事、迴光之時、擯出色聲香味觸法得寧謐、則成功勳。後却不執六塵、墮而不昧、任之無礙。（四六九頁b）

（七）三者沙門異類「後云披毛戴角」、謂先知有本分事了、喪盡今時一切凡聖因果德行、始得就體一般、名爲獨立底人。（四七〇頁a）

（八）問、如何是往來異類。餘曰、未知有自己。（四七〇頁b）

(九) 如何是水牯牛。曰、矇矇矇矇。此意如何。曰、不知有天地。(四七〇頁c)

これら諸例を見ると、意味的に「向上事」と見なせるものもあるが、必ずしもそう限定することのできないもの、そうする必要のないものも混じっていることが分かる。(三)の「異中異」は、「異」よりも「上」であるということ、また、(五)は「無出入息」という状態より、さらに「上」が「正位」であるということ、(九)の「向上事」と考えることができるが、その他の場合はどうであろうか。「自己」や「自己本分事」の有ることを知るといのは、特に「向上事」と呼ぶ必要はないように思われるし、(九)の「天地」になると、解釈いかんということになる。要するに、「知有」は「知有向上事」の省略形ではなく、より柔軟な、含みを持たせた表現であり、状況に応じて省略されたものを補って理解することを相手に要請するものである。逆に言えば、この省略されたものが何であるか、修行者の力量がためされる言い方であると言える。相手に十分な力量のないとき、「知有箇什麼」という質問がなされることがある。曹山の場合には、次のようなやりとりが見られる。

祖佛不知有、狸奴白牯却知有。爲什麼狸奴白牯却知有。曰、祇是百無所解。祇如祖佛爲什麼不知有。曰、祖爲執印佛爲相似。祇如狸奴白牯、知有箇什麼。曰、祇知有狸奴白牯。如何是狸奴白牯知有底事。曰、不從西東來、不從三十二相得。(同四六九頁d)

つまり曹山の答は、「狸奴白牯」は自分自身を知っているのであり、それは達摩や佛陀から得たものではない。禪の表現で言えば、「知有自己」であり、その自己は「本有」であるということである。

⑦秋月『趙州録』では、これを注して「誰知らぬ真夜中に、月光が方丈の窓にさしこむのは無心の働き、何の報いも求めない無功德行である。檀家の牛となつて働く心境もまたそうであり、それはすでに昨夜にも現前している。これからそうなるというわけのものではない」と言っている。いろいろな則に「無心」という言葉を持ち込んで、一種定型的に解釋しようとするのは、この書の特徴の一つである。

⑧たとえば、『禪學大辭典』は、駒澤大學の編纂という事情もあり、曹山の解釋の影響から、先に見たような説明になったものと思われる。また、秋月氏の場合も、『禪の古典の味わい方』に異類中行を説明するなか、「不變眞如(後出の『類』、ないし正中偏)より隨緣眞如(同じく『異』、ないし偏中正)こそ大事です。現代の禪僧はすべからず異類中行(正中來)ということを中心がくべきです。……畜生の行を行じて、畜生の報は受けません(兼中至)。……半ば否定し半ば肯定したのです(一手抬一手擲—兼中到)。(九八頁)というように、異類中行を五位に絡めており、曹山の影響によることは明らかである。

⑲すでに宇井伯壽氏によつて、次のような指摘がなされている。「曹山の故郷は、宋高僧傳によれば、儒風が頗る盛であつて、小稷下と稱せられた程であつた。稷下は、昔、六國の齊宣王が文學を喜んだので、齊の稷下に學士數百人が集まり、凡て談説の士であつたといはれた土地の名で、此故事に因んで小稷下といはれたのである。従つて、曹山も少より儒學を學び、九經に通じ、道性天發すといはれた。かく曹山が儒學に傾心し、學者的であつたことは頗る注意すべきことで、雲居とは性質を異にして居た如くである。宋高僧傳も、曹山について、蓋以寂素修學業之優也、文辭遒麗、號富有法才焉、というて居る。この學者的であつたことが、後年洞山の五位について、區域を詮量して其分齊を盡くさざるは無しといはれるに至つた所以であつて、禪者としても、一方に學者的頭腦の迥えを表はす點があつたと考へられる。雲居にはかかる點がない如くで、其言に渾然たる所が見えるが、曹山の言には截然たる所が存する」 「曹山の家風は曹山自身のもつもので、他の弟子では、其器でなくば、繼承せられ得ないであらうと思はれる」 (『第三禪宗史研究』一二二五頁、岩波書店、昭和一八年)

⑳『祖堂集』では、これを次のように記している。『曹山録』もほぼ同じ。  
初造洞山法筵。洞山問、闍梨名什麼。對曰、專甲。洞山云、向上更道。師云、不道。洞山曰、爲什麼不道。師云、不名專甲。洞山深器之。盤泊數年、密室承旨。(『祖堂集』一五七頁a)

この「數年」を、宇井伯壽氏は、「長くとも、せいぜい三、四年」と推定している。(『第三禪宗史研究』一二二九頁)

㉑「主宰」となることの重要性について、曹山は次のように言っている。  
若也承當處分明、即轉佗諸聖、向自己背後、方得自由。若也轉不得、直饒學得十成、却須向他背後叉手、說甚麼大話。若轉得自己、則一切鹿重境來、皆作得主宰。假如泥裏倒地、亦作得主宰。(續藏一一九・四六五頁a)

㉒宗門異類については、もう一箇所、「如何是宗門中異類。餘曰、要頭則研(研の誤植)將去(續藏一一九・四七〇頁b)という問答があるが、これもまた、日常における行爲のありかたを示唆したものである。

㉓『傳燈錄』の洞山章に収録される。

僧來舉問茱萸、如何是沙門行。茱萸曰、行即不無、人覺即乖。師令彼僧去進語曰、未審是什麼行。茱萸曰、佛行佛行。僧迴舉似師。師曰、幽州猶似可、最苦是新羅。……僧却問師、如何是沙門行。師曰、頭長三尺、頸長二寸。(大正五一・三三三頁a)

㉔この「古人」とは、おそらく百丈を指すと思われる。實際、百丈は、



「説如今鑒覺是自己佛、是尺寸語、是圖度語、似野干鳴、猶屬麴膠門」（『百丈廣録』續藏一一八・八三頁c）  
と言ひ、また、

須識了義教不了義教語。須識遮語不遮語。須識生死語。須識藥病語。須識逆順喻語。須識總別語。說道修行得佛、有修有證、是心是佛、即心即佛、是佛説、是不了義教語、是不遮語、是總語、是升合擔語、是揀穢法邊語、是順喻語、是死語、是凡夫前語。不許修行得佛、無修無證、非心非佛、佛亦是佛説、是了義教語、是遮語、是別語、是百石擔語、是三乘教外語、是逆喻語、是揀淨法邊語、是生語、是地位人前語。從須陀洹向上直至十地、但有語句、盡屬法塵垢。但有語句、盡屬煩惱邊收。但有語句、盡屬不了義教。了義教是持、不了義教是犯。佛地無持犯、了義不了義教盡不許也（『百丈廣録』續藏一一八・八四頁a）

というように、「語」というものに對して、非常に敏感で、多言を費やしている。これは、この部分だけではなく、『百丈廣録』全體を通じて見られる大きな特徴であり、「言葉」の問題、「表現」の問題が、百丈の周邊で非常に深刻な問題として存在したことが推定される。

なぜ、そのような事態が発生したのであろうか。その主要原因は、禪宗の展開そのものに求めることができるように思われる。

すなわち、馬祖・百丈の時代、馬祖禪はいわば新興宗教であり、多かれ少なかれ、既成の佛教集團と對立しつつ、その勢力を拡大しなければならなかった。その既成集團には、初期禪宗集團はもちろんであるが、おそらくより大きな勢力集團として、天台、法相、華嚴、律などといった、教家諸派との對立がより深刻であつたろうと思われる。これら教學諸派の最盛期に、新興勢力を維持し、展開するためには、馬祖の傑出した創造的天才と、百丈のような反省的批判的能力が、不可欠となる。

つまり、馬祖によつて、拂拳棒喝を含む、全く新しい形の實踐佛教の形態が開發されると同時に、これを舊來の既成佛教集團の流れのなかで維持發展させるためには、自他の特徴、方法論、優劣を批判的に比較し、これを的確に表現する能力が要請されたのである。舊來の中國佛教との批判的比較を通じて、自己の立場の正當性を明らかにし、舊來諸派の攻撃に對抗するだけの力を持たなければ、勢力の擴大は難しい。こうした能力なしには、折角創出された馬祖禪も、風変わりな新興宗教として、一時的な注目を集めても、中國佛教の本流として根付くことはできなかったであろう。百丈は、こうした能力に恵まれていたのであり、これを驅使して、既存勢力との對決の上で、馬祖禪の基盤を構築していったのであり、そうした苦闘のあとが、こうした「語」に對する異様な關心となつて反映しているのである。馬祖禪の維持發展を實現する上で、その果たした役割は、決定的に大きい。

馬祖（七〇九―七八八）が禪師號を諡されるまでに、死後二十五年を要したのに對し、百丈（七四九―八一四）の場合は、死後、わずか七年で禪師號を諡されている。この事實は、百丈の持つことうした能力によって、傳統的な中國佛教諸派と竝んで、時の朝廷が馬祖・百丈の禪を正統なものとして受容したことを示している。つまり、百丈の活躍によって、馬祖禪は朝廷の公認を得たのであり、馬祖が諡を得ることができたのも、百丈の力によるところが大きい。馬祖が禪師號を諡されたのが百丈の示寂の前年であることが、何よりもこれを如實に物語っている。

③⑤ 宇井伯壽『第三禪宗史研究』（岩波書店、昭和一八年、一一二頁）の曹山語録對照表による。

③⑥ ただし、テキストの異同を調べるため、『重編曹洞五位顯訣』『洞上雲月録』などを參照した。

③⑦ 「三然燈」では、然燈前、然燈後、正然燈の三種を區別し、さらに然燈前に「未知有」と「知有」の二種を區別する。然燈後は「知有」であるけれども云々、というふうに續き、「往來異類」が「未知有」であるとは異なっている。同じく「言語・聲色・是非」に「往來」しても、「往來異類」のほうがより重症なのである。

③⑧ 僧肇の「物不遷論」が關係するか\*\*。

③⑨ 『祖庭事苑』が「正宗記略」と言っているのは、契崇の『傳法正宗論』のことで、卷下第三篇からの引用である（大正五一・七八一頁a）。